

沖ノ島の戦時遺構

岡 崇

(1)はじめに

沖ノ島に存在する戦時遺構は、第二次世界大戦という人類全体にとつての負の行為によって、日本人自らが聖なる島に傷を与えた事実を伝えるものとして、今日、原生林の中にその痕跡をひっそりととどめている。沖ノ島の戦時遺構について報告する前に、1つ課題を整理しなくてはならない。それは、世界遺産登録を目指している最中に、価値とは真逆の戦時遺構をあえてこのタイミングに出す必要があるのか、つまり、登録活動に負の影響が出ないかという点である。

日本と大陸との最前線に位置している沖ノ島は、古代にはじまる対外交流における航海安全を願った祭祀の場であり、その後、信仰の対象として現在に至っているのだが、日本国の危機といつても過言ではない先の大战でも、国防上、重要な場所に位置していた。当時の差し迫る軍事的必要性のなかで、軍事遺構の建設に踏み切らざるを得なかったことは、沖ノ島の地理的環境に起因する、止むに止まれぬ選択であった。

戦時中、軍部と宗像神社（現 宗像大社）との沖ノ島をめぐるやりとりが、宗像大社の『庶務書類』一（貸地借地関係3）に残されている。宗像神

社の氏子らは、沖ノ島を陸軍用地とするに当たっては、勅使参向を上奏し、最高の祭儀により神意に基づいて決すべきことを上申し、その神聖性を守ることを主張した。中でも、氏子の一人が樺本憲昌宮司へ打った「身を賭して沖ノ島を守れ」の電報は、沖ノ島を信仰する人々の想いを代弁しているように象徴的である。軍部との交渉の結果、「神社境内地貸与条件」として、上陸の際の禊、島内で排泄をしないこと、一木一草一石も持ち帰らないこと、やむを得ない場合を除き樹木の伐採、採石、採土、土地の形状の変更をしないことなどが定められ、沖津宮社殿及び祭祀遺跡周辺には一切の手を加えず、軍道や砲台、弾薬庫などが築かれることとなった。さらに付け加えると、沖津宮の御霊は、仮に本殿が爆撃を受けても、助かるようにと別の地下倉庫に納め、戦後、本殿に移したという話が残されている。

現在、沖ノ島での戦時遺構は、人為的な破壊や開発に伴う消滅をほとんど受けず、風化によって朽ちる一途をたどっている。負の遺産は負の遺産として、沖ノ島の歴史的事実を伝える物証であり、世界遺産の価値とあわせて正確に後世へ伝える使命が我々にはあるだろう。そのことは決して世界遺産の価値を損ねるものではなく、沖ノ島の歴史と信仰を理解する上で不可欠なものであると確信している。

(2)これまでの戦時遺構についての調査

本報告は、国指定史跡「宗像神社境内」及び国指定天然記念物「沖の島原始林」の保存管理計画策定に伴って行った調査や航空レーザー測量と同時に現地踏査や現地実測から得られた情報を基にしている。

すべての資料を網羅しているわけではないが、この調査以前に沖ノ島での戦時遺構に関する情報として、『下関重砲兵聯隊史』（1985年）がある。これには、沖の島砲台が、昭和12年6月に着工し、昭和15年3月に竣工したと記される。島には、96式2連装15糎加農砲4門の砲台が設置され、島の東北部と白岳の北側には、第1砲台の2連装15糎加農砲が、また、第2砲台は、島の北西部鯨瀬の南側に構築したと記さ



図1 沖ノ島防備衛所 (水上電探)
「4 派遣隊所在各地区 (13) 沖ノ島派遣隊」
(アジア歴史資料センター所蔵、レファレンスコードC08011400400)

れている。さらに、観測所は、白岳側の第1砲台と三ノ岳の間に設置されていたという。沖ノ島には下関重砲兵第6聯隊と召集兵が戦備に着き、沖の島海軍防備衛所には、約50人が配備されていた。そのほか沖ノ島には、平時に神主と灯台看守の2名いたようである。また、兵隊や

べ5万人の動員で、沖ノ島の戦時施設が築かれたことがわかる。また、アジア歴史資料センター所蔵の地図（図1・2）には軍事施設の種類と位置が記されている。

戦時中、沖ノ島の戦時施設が最高レベルの極秘機密だったことが、これらの資料から推測される。今回の調査では、この図に書かれている場所と整合することができず、現在も不明な点が多い。

さらに、昭和29年から30年にかけて実施された沖ノ島祭祀遺跡の第1次調査をまとめた報告書のなかに、軍道や砲台の位置を記す簡易的な地図が沖ノ島地形図（図3）と



図2 沖ノ島防備衛所
「4 派遣隊所在各地区 (13) 沖ノ島派遣隊」
(アジア歴史資料センター所蔵、レファレンスコードC08011400400)

將軍を問わず沖ノ島上陸の際は、必ず禊を行っていたとされる。結局、約3年間の歲月をへて、延



図3 沖ノ島地形図（『沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡』第五図）

して掲載されている。ここでは、軍道が白岳まで延び、沖ノ島の東尾根稜線上、つまり白岳と西稜線上の2カ所に砲台跡があると示されている。

さらに2008年12月29日の朝日新聞朝刊(【図4】)の記事として取り上げられ、筆者も沖ノ島に多くの戦時遺構がほぼ手つかずの状態に残っている事実を知った。

その後、宗像市の海の道むなかた館で上映するための3D撮影で沖ノ島に渡島した際、沖ノ島に詳しい大島の元海上タクシー船長佐藤守氏の案内で現地を踏査した。



図4 2008年12月29日(月)朝日新聞朝刊

(3) 航空レーザー測量調査と踏査による遺構確認

佐藤氏との現地踏査の経験を踏まえて、2012年、保存管理計画策定のための基礎調査の一環として航空レーザー測量により沖ノ島全島の撮影を試みた。航空レーザー測量は奈良の古墳の墳形などを詳細に作図した実績があるが、ある波長を地面に反射させて地面の凹凸の状況を画



図5 赤色立体図位置図

像として読み取るという特殊な方法である。通常、木が生い茂っているところにおいては、詳細な地面の起伏を表現することは不可能であったが、航空レーザー測量によって作成された赤色立体測量図(3次元数値標高モデル、【図5】)をつかうことでつぶさに細かい地形を読み取ることができるのである。再度、赤色立体測量図を片手に現地をくまなく踏査したところ、これまで知られていた砲台2つに加え、沖ノ島の戦時遺構に関する情報を詳細に確認することができた。今回は、この時の調査を基に現状を報告したい。

1. 軍道と軍施設等

軍道について、登り口から終点に至るまでの軍施設と合わせ詳細に記しておく。沖の島漁港の東側と陸域が接するところからさらに東へ約30m進んだところに、沖津宮の社務所へ水を供給するための水タンクがあるがその近くから軍道が始まると推測される。というのも軍道の起点は、戦後の漁港整備等に係る土石採取（正確には埋め立て用の岩盤掘削）によって削平されたことで消滅したのである。従って、現在残る軍道の起点は、水タンク背後の急斜面の標高10m付近から始まっている。

2. 土石採取の際の構造物 【写真1・2】

そこには火気厳禁の文字が赤字で書かれた構造物がある。天井部は、



写真1 土石採取に関連する施設



写真2 軍道

落ちて入るが入口を含め壁は四方残っている。この構造物は、戦時遺構ではなく、土石採取の際の火薬などを収納していた建物と考えられる。

軍道は、急傾斜になると必ずジグザグに登る構造になっている。残っている軍道のはじまりから、最初の屈曲点は、踊り場のようになっており、もう1棟の構造物が確認できたが、既に建物そのものが崩落している。これも、土石採取の際の建物と考えられる。

3. 軍道と電柱 【写真3】

さらに軍道は標高の高い沖ノ島祭祀遺跡と標高の低い黄金谷との間の斜面を北に登ってまっすぐ伸びていて、軍道の東にある黄金谷側は、石垣を組んで道の水平を保っている。また、谷側の石垣上に等間隔で木製の電柱の基礎が残っている。



写真3 電柱

4. 祭祀遺跡と軍道

沖ノ島半岩陰・半露天祭祀遺跡（20号〔14号〕遺跡）に最も近づくところでは、この遺跡から流れ出たと考えられる土器（須恵器）の散布も確認できる。この土器の散布は、黄金谷の谷底からも確認され、同

遺跡からの流れ込みであると考えられる。そしてI号巨岩の岩上祭祀遺跡（17・18・19号遺跡）の北東側と岩陰祭祀遺跡（22号遺跡）の南西側で左にカーブし、西に進路を変える。沖津宮の社殿前から灯台へ至る山道と軍道は合流するが、約50m進むと、わりと丁寧に仕上げられた石垣の壁が見えてくる。ここから灯台へは右へ大きくカーブし、軍道は、石垣に沿ってそのまま直進する。

戦後間もなく灯台に重油を補給するために、この地点までバイクにタンクを乗せ運べたという古老の話を伺った。

5・1. 沖ノ島防備衛所(?) 【図6】【写真4・5】

軍道は、陸軍の防備衛所と考えられる建物群のあるコンクリート基礎

だけが残る場所に着く。

軍道は、防備衛所と思

われる間を西に進む。その

途中に山側（北側）に向う

道と分岐し、崖に向かって

岩盤をくりぬいて築かれた

要塞と思われる巨大な横

穴がある。入口は、上から

の崩落などにより、人が1

人、腹這いになってようや



写真4 防備衛所



写真5 防備衛所(建物基礎)

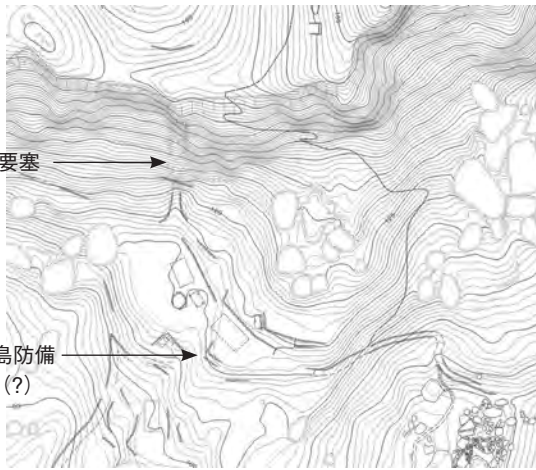


図6 位置図1

く入ることのできる隙間がある。要塞内部の軍の砲台跡や主要施設については、いずれもメートル法で設計され、築かれていることが測量からわかった。

5・2. 要塞 【図7】【写真6・7・8】

この要塞は、巨大な横穴構造で、入口幅3.0m、奥2.0mの前庭があり、その奥に扉のある鉄製の枠がつく。奥の部屋まで羨道のような幅2.7m、長さ7.7mのトンネルが続く、扉から3.7mまではコンクリートできれいに整形され、奥4.0mは、岩盤をくりぬいた鑿の跡が残る壁の整形は行っていない。扉から続くコンクリートの壁には、大島の古老がまだ若かったころに潜り込んで書かれたと思われる無数の落書きが見られる。奥の



写真6 要塞内部1



写真7 要塞内部2



写真8 要塞入口落書き

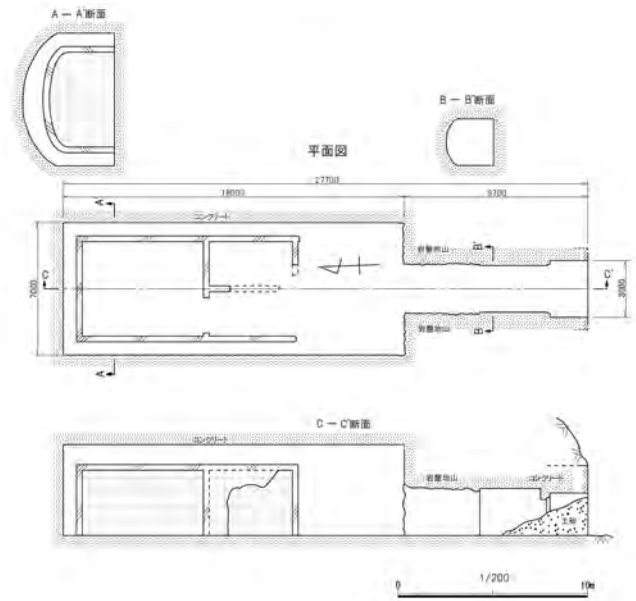


図7 南西側要塞跡

部屋は、奥行
き18.0m、幅
7.0m、両壁の
高さ3.0m、中
央部の最高所4.
75mで天井の
断面は、かまぼ
こ状を呈してい
る。さらにこの
空間内部に幅5.
6m、奥行残存
長11.7m、高

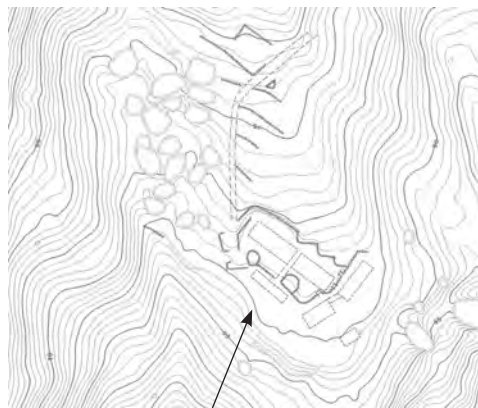


図8 位置図2 5-3. 海軍施設(?)

さ両壁2.4m、中央の最高所3.4mで、3つの部屋に区切られた構造物が
建てられている。内部の構造物の壁は、格子状に金具がはめ込まれている。

5・3・海軍施設(?)

【図8】【写真9・10】

沖ノ島防備衛所だったと考えられるところは、南西側、つまり大麻畑方向へ下る分岐点でもある。下へ降りると高い石垣を組んで平地を確保して建物が並ぶ拠点施設にたどり着く。防備衛所とされる陸軍兵舎と、この石垣に囲まれた建物群を海軍兵舎といわれているが、確実な証拠はないものの、案内の佐藤氏からの聞き取りによると、雑な野面積の石垣を組んでいるところは陸軍で、丁寧に石垣を組んでいるところは海軍兵舎と判断しており、沖ノ島島内でも陸軍と海軍は仲が悪かったという。

海軍兵舎とされる周辺の石垣は、面取りが丁寧に表面はうまく整形されている。この海軍兵舎跡とされるところをさらに下ると深い谷となり大麻畑に続く。この大麻畑は、現在木が生えていない草原のような場所で、樹木帯の切れるギリ



写真9 海軍施設(建物基礎)



写真10 海軍施設(石垣)

ギリのところに貯水升を設け、当時は水を溜めていたと思われる。沖ノ島の報告書では、この大麻畑周辺の兵舎を築いたときに、細形銅矛が出土したとされる。

いずれの海軍兵舎、陸軍兵舎も現在は、コンクリートの基礎の部分のみが残されている状況である。古老の話では、終戦直後は、木造の建物が残っていて、上物は竹浦組が廃材を持って帰ったという。また、同時に朝鮮の人たちが持つて行ったという話もある。さらに木材は、薪にしたとも聞いている。

6. 沖ノ島北西側の軍施設【図9】

軍道は、さらに西へ延びる。北西側の砲台へと続いているのだが、その途

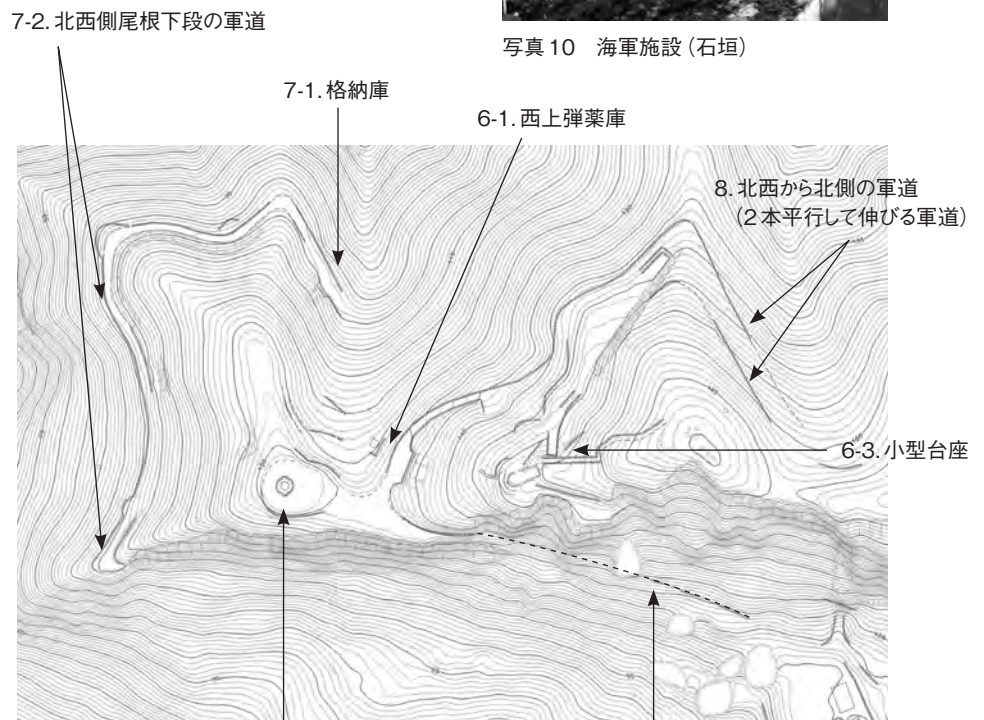


図9 位置図3

6-2. 北西側砲台の台座跡

6. 沖ノ島北西側の軍施設
(急傾斜地に築かれた軍道)

中は、かなりの急傾斜地に築かれたようで、いつの時期か崩落し、今はつながっていない。現在、西側尾根につながる軍道は通れない。
北西側の尾根には、砲台の台座、弾薬庫がセットで配置されている。その間には、トイレと思しきコンクリートの基礎が確認できる。弾薬庫はその尾根の側面を削り貫いて築かれる。



写真 11 西上弾薬庫外観



写真 12 西上弾薬庫内部

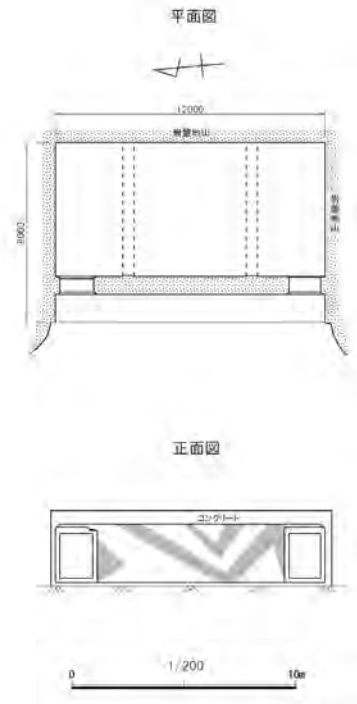


図 10 北西側中弾薬庫

6・1. 西上弾薬庫【図10】【写真11・12】
弾薬庫は、両端2カ所に入口があり、鉄の枠がはめ込まれている。内部

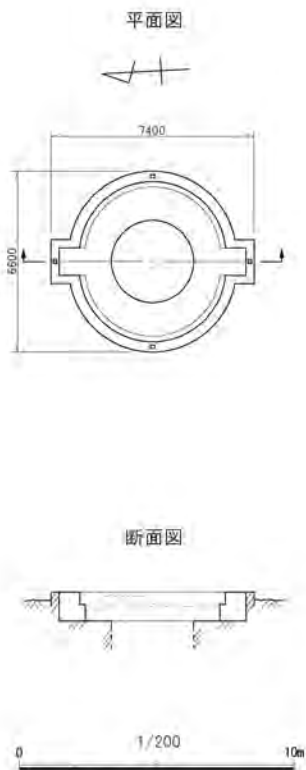


図 11 北西側中砲台跡

6・2. 北西側砲台の台座跡【図11】【写真13】
弾薬庫とセットで砲台が築かれる。砲台の台座は、円形で2カ所にコの



写真 13 北西側砲台の台座跡

は3部屋に分かれていて、全体は、幅12.0m、奥行き6.0m、高さ2.5mを測り、3部屋のうち両端の2部屋は、幅3.0m、奥行き6.0m、中央の部屋は幅5.0m、奥行き6.0mを測る。部屋と部屋は、幅0.5mのコンクリートで仕切られている。内部は、白色の塗料で丁寧に塗られ、表の壁は黒色の塗料で図のような模様が描かれている。



写真 14 小型台座



写真 15 小型台座手前のトンネル

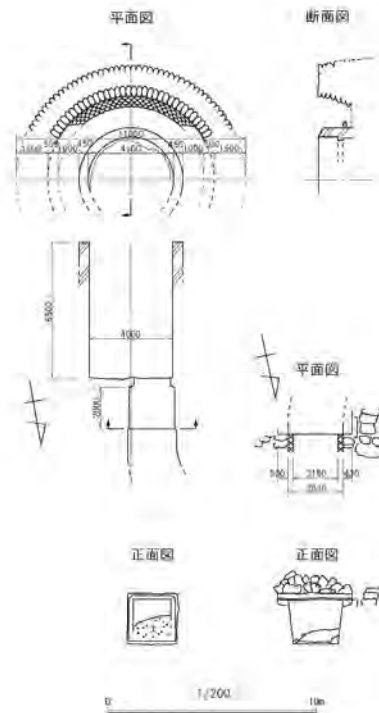


図 12 砲台

字形の繰り込みがある。外径 6.6m、コ字状の繰り込み部分の幅 7.4m を測る。床は 2 段構造で、中心部は落ち葉などが堆積し深さは不明である。

6・3. 小型台座 【図 12】 【写真 14・15】

弾薬庫や台座のある尾根を登っていくと、灯台に登る山道に合流するが、その途中にも小型の台座？（高射砲ではないかともいわれている）がある。この小型の台座に至るまでの道は、石段やコンクリートの路面で丁寧に築いている。主要軍道は尾根を大きく右にカーブし東側向きを変え、その軍道から右に鋭角に曲がる道があり、尾根を貫いて右にカーブしながらトンネルを潜って台座に着く。トンネルは、高さ 2.0m、地面幅 2.0m、天井幅 2.7m と逆台形状を呈している。トンネル入口天井部には、礫を積み重ねカモフラージュしている感がある。台座は、厚み 0.45m のコンクリート製の筒状で内部に突起部が一周し、外側にも幅 1.0m、厚さ 0.3m ほどの取手状の突起物がある。筒状の台座の内径は、4.1m の円形である。この台座の外側約 1m から 2m に、礫を積んだ幅 1.5m の壁が台座の高さにあわせて周囲を囲む。

7. 北西尾根の下（ボンノセ）側の軍道

今回の赤色立体地図の解析で、北西尾根には、もう 1 つ軍道があることが確認され、現地を踏査した。尾根を右に迂回する主要軍道から左側の谷を下る小さな道があったらしく、途中、ジグザグに降りていたと思われる道の縁を知らせる礫列がところどころ確認できる。下りきったところから、西側に向けてさらに軍道が伸びている。ジグザグに降りて軍道が西に進むとすぐの進行方向左崖面に、格納庫と思われるコンクリート製の構造物が現れる。

0 m、奥行き4.0 mを計る。外枠と内枠の間に、厚み0.4 mの壁が囲み、その壁と外枠の幅が0.6 mと人が1人通れる程度である。外枠奥の天井には、通気口のような地上に向けた0.5 m×0.4 mの穴を開けている。内法の床面には、コの字状の段が施され段の高さは0.2 mである。



写真 16 格納庫

この構造物は、
2重構造になって
いて、外枠の内法
は、幅5.0 m、奥
行き6.55 m、内
枠の内法は、幅3.

7・1. 格納庫

【図13】

【写真16】

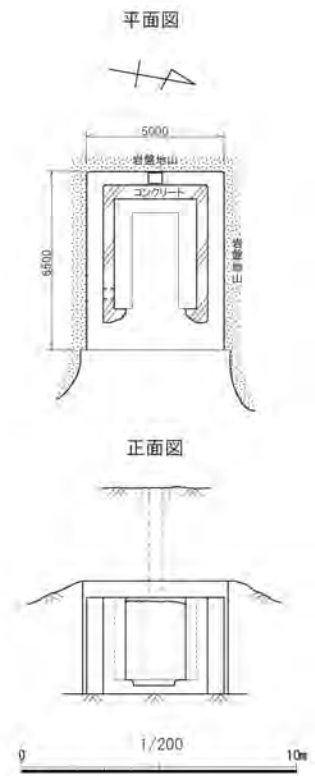


図 13 北西側下格納庫

7・2. 北西側尾根下段の軍道【写真17】



写真 17 対馬南端方向

軍道は、さらに西から南西へ向かう。この軍道が、他の軍道と異なっている点は、北側や西側の崖際に柵の様な石柱が等間隔に立てられているところである。南西に延びた軍道は行き止まりになるが、その縁に方向柱が立てられている。その方向柱は、4本あって向って左から「大島西端方向」「小呂島方向」「〇〇北〇」「対馬南端方向」と刻まれている。

8. 北西から北側の軍道

北西尾根の本線軍道に話はもどるが、鋭角に右に曲がると小型の台座に至る道の途中から左側には崖を大きく削り地面を平らにした比較的大規模な区画を作り出している。削り出した崖面の2カ所に奥行1.2 m強と奥行8 m強の素掘りの横穴が掘られている。

この区画の縁を主要軍道は進み、区画の角をほぼ直角に右へ曲がるとやや坂道となって南東方向に直線的に登っていく。この直線的な軍道は、2本平行して伸びている。この2本は、軍道の新旧を示している。2本伸びている上側の軍道が旧道であったことは、先ほどの区画の角でバツサリ削

られていることわかる。直線的に登っていた軍道は、谷部分を左にカーブし地形に合わせて北東側に進路を変える。しばらくは何の変化のない軍道が続く。

9. 一ノ岳からの尾根と軍道【図14】【写真18・19】

一ノ岳から北北西に大きな尾根が伸びているが、この尾根と軍道が混じ合うところで軍道の海側に長方形に区画された石垣を組んでいて、その上部は平らに整地されている。その周辺には、陶磁器の茶碗なども落ちていた。同時に一ノ岳へ登る部分に数段の階段が築かれ、一ノ岳との行き来ができたと思われる。



写真18 コンクリート製の甕



写真19 長方形区画

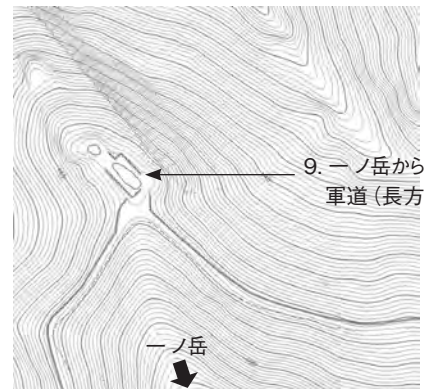


図14 位置図4

調査や撮影で白岳方面へ向かうときは、この谷部から軍道は再び左カーブし北東方向に進む。これから先はしこの谷部へショートカットすることできる。

この尾根から軍道は右にカーブし、南東側に向きを変え、一ノ岳と二ノ岳との間の谷部に至る。この北に面した谷部は、安定した広さを保っており、高さ5mほどの石垣を組んでおり、谷部全体は、所々に区画やコンクリート製の筒状の割れた甕などが認められる。

10. 一ノ岳と二ノ岳の谷部から北へ【図15】

この谷部から軍道は再び左カーブし北東方向に進む。これから先はし



図15 位置図5

10. 一ノ岳と二ノ岳の谷部

ばらく、上部からの土砂崩落により、軍道が埋まり、道を見失うということがある。基本的には、ほぼ同じ標高、つまり地形図では170mの等高線に平行して進むことで軍道が再び現れる。軍道の本線は、二ノ岳から北へ延びる尾根を切る。この切られた法面の斜面には、直径20～30cmほどの穴がいくつも穿たれているが、用途は不明である。軍道は、南東方向に向きを変え二ノ岳と三ノ岳の間の谷部に至る。

11. 二ノ岳と三ノ岳の谷部から白岳へ

二ノ岳と三ノ岳の谷部は、一ノ岳と二ノ岳の谷部に比べるとかなり狭い谷であるが、軍道としては、深さ5mほどのV字の石垣をみることが出来る。

三ノ岳の北側に膨らむ北斜面を進むとようやく白岳に到着する。その間も白岳側の法面を削って区画を設けている箇所があり、コンクリートの基礎が確認できるが、おそらく監視台のような場所であったと考えられる。

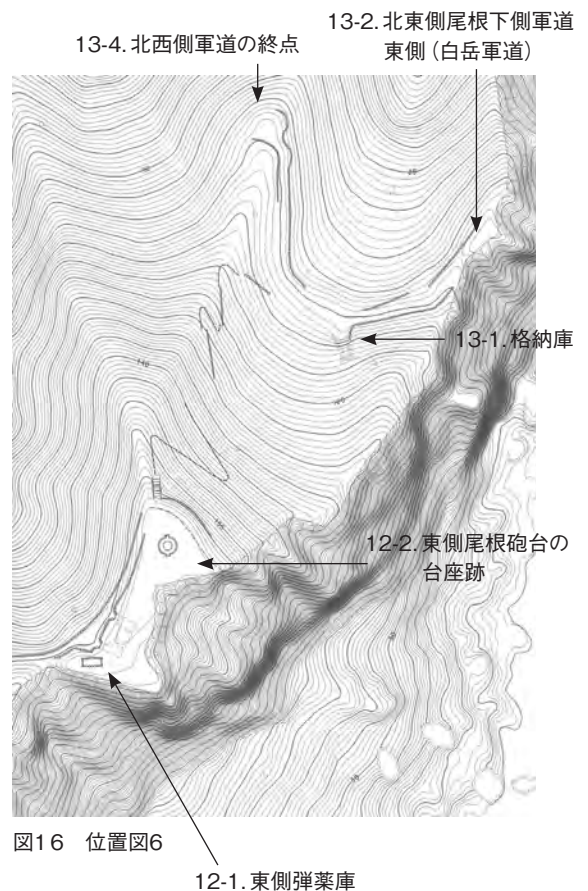
12. 白岳周辺【図16】

地元大島の人々は、白岳を白滝しらたけとも呼んだ。海から見ると岩肌が白い滝のように見えるというのが語源のようである。この白岳周辺にも砲台の台座と弾薬庫がセットで設けられている。弾薬庫手前から軍道を外れて白岳の崖上に立つことができるが、その見晴らしの良い崖の手前にも四角く地面を掘って壁を石積みで組んだ見張り台のような施設がある。軍道の本道に戻って東へ進んですぐ右側崖面に2つ目の弾薬庫がある。北西側



写真20 東側弾薬庫内部

の尾根にあった弾薬庫と内部の構造は基本的に同じであったが、細部では異なる部分もある。



12・1. 東側弾薬庫

【図17】【写真20・21】

白岳の弾薬庫は、入口正面の壁をカモフラージュするために割り石を張り付けている。全体の内法は、幅13m、奥行き8mを測り、計3つの部屋からなっている。3つの区画の両側にそれぞれ入口があり、真ん中の部屋へは、左右の部屋から入ることがで

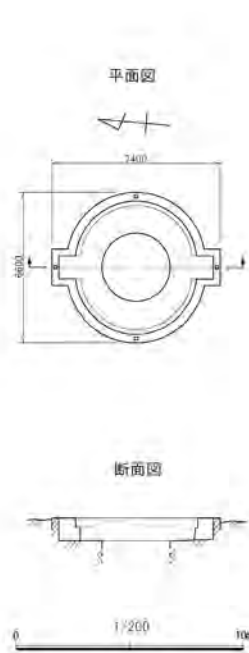


図 17 北東側下弾薬庫・砲台

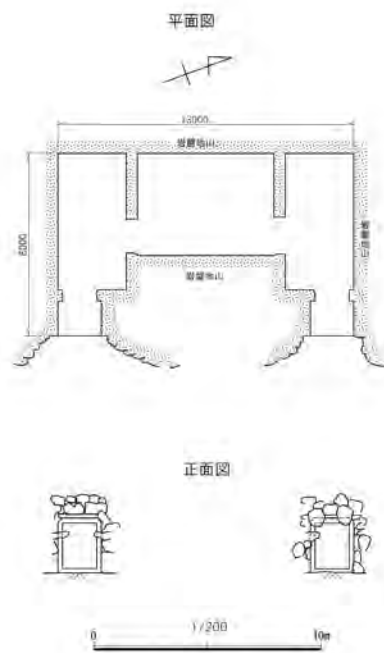


写真 21 東側弾薬庫入口

が、この白岳から北東側に下ったところにも同じような軍道がある。白岳の砲台で一旦、軍道は終わるが、そこから、階段となって道は北東側の軍道へと下っていく。この間も急激に下ることから道はジグザグに作られている。北西側の軍道から下の軍道へ下る道と同じジグザグの道であるが、北東側の道のほうがまだ残りが良い。崩落箇所はいくつもあり、途中、当時のも製電柱そのものが落ちている状態で、当時の道を復元することが難しい状況である。北西側尾根の下軍道は、下ると西側に一方方向に軍



写真 22 東側尾根砲台の台座跡

きる。鉄のフレームが残っているがかなり風化が進んでいる。また、扉もあつたようであるが、現在は既にある。

12・2・東側尾根砲台の台座跡【写真22】

軍道はさらに弾薬庫の前を通過し、東へ延びているが、砲台の台座があるところで一旦の終点となる。この台座も北西側の尾根にある台座と基本的には規模、構造とも同じものである。

13・北東側尾根下

(ワレノ鼻)側軍道

北西側尾根(ボンノセ)側にもう1つの軍道があることは紹介した



写真23 格納庫

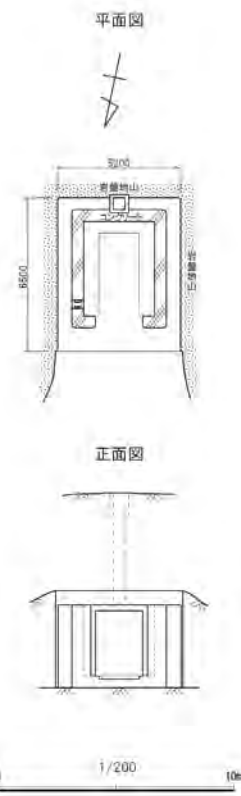


図18 北東側東下格納庫

道が延びているが、北東側尾根（ワレノ鼻側）の下の軍道は、ジグザグの道を下り終えたところから東側と北西側の両方向にさらに軍道が伸びていることである。

13・1. 格納庫

【図18】【写真23】

東側の軍道が始まる直前の右側の崖にこれまた北西側尾根の下の軍道にもあった格納庫と同様の施設がある。形状や高さなどは、全く同じで2重構造をしている。この構造物の前の少し広くなったところに当時、道を慣らすローラーが無造作に置いてある。



写真25 東側軍道の終点



写真24 白岳軍道

13・2. 北東側尾根下

（ワレノ鼻）側軍道東側

【写真24】

海から白岳を見上げると岩の割れ目が縦に垂直に並んでいる状態を見ることができ、その一部に不自然な横方向の岩があることに気付いた佐藤氏は、昔から船から見上げて疑問に思っていたという。この横の不自然な岩は、この東側に延びる軍道のコンクリートの構造物の一部であることが現地へ行つて確認できた。軍道から白岳側へ直角に近い角度で落ちるためコンクリートで補強し、なおかつ転落しないように柵がわり作られたと考えられる。そしていよいよ軍道の東の終点となる。

13・3. 東側軍道の終点

【写真25】

この終点にも方向柱がある。こ

の方向柱は10本確認され、「左照明界」「対馬北端方向」「眞北方向」「蓋井島方向」「観音崎方向」「角島方向」「玄海島方向」「小屋島方向」「小呂島方向」「右照明界」と刻まれる。

13・4. 北西側軍道の終点【写真26】



写真26 北西側軍道の終点

白岳からジグザグに下りきった地点から東側に延びる軍道は、すでに行き止まりとなることは現地でもわかったが、北西側に延びる軍道がどこまで延びているのか踏査だけではわからなかった。しかし、赤色立体測量図によって行き止まりとなることがわかった。沖ノ島の北西尾根に自生しているビロウの調査や撮影は、この軍道を途中まで通って、ビロウが生えている尾根の中腹まで下って近づくことができる。この軍道の終点にも方向柱が立てられている。この方向柱は6本確認され、「左照明界」「対馬北端方向」「眞北方向」「角島方向」「北臺首線方向」「右照明界」と刻まれている。

(4) まとめ

以上が、赤色立体測量図をもとに現地踏査した軍事遺構の現状である。風化しつつも、先の大戦の痕跡は沖ノ島に深く刻まれている。

軍事遺構は沖ノ島における負の側面であるかもしれないが、それが造られた歴史的背景を無視して、存在を否定してばかりでは沖ノ島の真の価値を理解することはできないだろう。むしろ、軍事遺構が造られたにもかかわらず、禁忌は厳守され、祭祀遺跡を中心とする沖ノ島の信仰の核ともいべき場所は手つかずのまま残されたことを強調すべきではなかろうか。当時の情勢と軍部の権力を考慮すれば、これは奇跡的なことである。

祭祀遺跡と戦時遺構とは、時代や内容がまったく異なるものの、沖ノ島にとってはどちらも日本列島と大陸に挟まれた地理的環境と対外関係から起こった事象と捉えることができる。その意味で、両者は古代から現代に至る沖ノ島の歴史と価値を理解する上で、不可欠な遺跡なのである。

明治期の日本海海戦は沖ノ島沖で勃発し、その慰霊として毎年5月27日に、沖津宮現地大祭が行われる。沖ノ島は、航海安全のみならず、世界の平和を身を以て願う御神体である。軍事遺構を通して、我々はどう一度、沖ノ島に対する信仰を見つめ直す必要があるのではないだろうか。

参考文献

- 一九五八 沖ノ島 宗像神社沖津宮祭祀遺跡 宗像神社復興期成会
- 一九八五 下関重砲兵聯隊史 下関重砲兵聯隊史刊行会
- 二〇一四 国指定史跡「宗像神社境内」国指定天然記念物「沖の島原始林」保存管理計画書 宗像市教育委員会